

染織調査 — 拡大写真のこと —

長かった京都国立博物館勤務ではあったが、全く無一物という状態で染織工芸史の分野に飛び込み、結局、やはり無一物に近い状態で、職を辞し、いつそう粗末な今日の生活である。これをとても研究生活という事は出来ない。

そうした中で調査に出かけ、思いがけない作品を拝見し、あるいは幾度か接している作品でも見る都度、何か別の感動が得られる時など、これが「冥利」ということと思った。調査の時は、調書を取るのはいまでもないが、悪い癖でどうも無闇に数多くの写真を撮ってしまう。記録写真・調査写真といえれば聞こえはよいが、実は見落したり、十分に観察の出来ていないところを、後で補おうというつもりである。すなわち十分な調査が出来ていないという、自信の無さのあらわれである。実際は後に写真によって補えることは、結局、作品に接してすでに見知っていることに限るのである。それでもリヴァーサルフィルムで、その現像の出来上り運ばれるのをわくわくしながら待ち、長尺のままとしたフィルムを両手でひろげ、陽光や灯下にかざして見る時の思いは忘れられないし、その思いは今も変ることではない。しかし変わったのは、今にして言えばその時の全く贅

切畑 健

沢としか言いようなない環境で、無理を言えば、その日の内に仕上げてもらうことが可能であったことである。今はどんなに早くても一晩はかかり、時間がはずれたり、取次店の休業日にかかったりすると、予定は全くたたなくなってしまうのである。仕上がりを見るのは、全く嫌なものであった。それは今も同じで、自分の撮影に自信がないからで五十年近く同じ場面を演じつづけているのである。

染織品の調査写真は、全図やごく通例の部分写真はいうまでもなく、さらに拡大写真は織の組織や刺繍の針足、絞染の縫絞る針目などを検討するのに欠く事はできない。織物については全くの素人である者を危ぶんで、その頃、佐々木信三郎先生が手を取るようにして織のこれからご教授下さった。製織のご経験のある先生とちがって、機ごしらえのことなど全く知らない、その上にたまたまなく飲みこみの悪い者を相手にして、呆れておられることがよくわかった。心ばかりの大へん少い謝金であるが、有難いことに毎週火曜日毎にご来館下さり、染織収蔵庫に隣った調査室で、その頃はまた北の窓が生きていたが、窓際に机を寄せ、前田家伝来の名物裂を一裂づつとり出しては、先生と向い会って、双方の近い部分を拡大鏡で観察しな

がらの、大へん厳しいご指導であった。

博物館では毎年、館蔵品をとりあげて、館蔵品図録を刊行する予算が計上されていた。昭和四十七年（一九七二）は、先に国有となっていた熊野新宮、阿須賀神社に伝来した古神宝類を内容とする出版が決定し、漆工芸と染織部門が担当した。古神宝中の染織は綾の袍、裳、浮織物の唐衣、二重織物の袷、石帯袋・挿鞋・箱内貼などの錦類である。佐々木先生は有職織物には自信がないと仰りながら、名物裂と同様、逐一のご指導をいただいた。その結果が『京都国立博物館蔵

国宝阿須賀神社伝来古神宝』（昭和四十七年刊）である。先生のお考えで、図版には出来るだけ、染織の拡大写真を加える事とした。撮影のすべては、当時非常勤職員の写真家、中川慶子氏によった。

現在のこの種の出版にあつては、織の組織の細部がうかがえる拡大図は当然のように収録掲載される。しかも原色で処理されてその効果はめざましい。古神宝図録では十枚の拡大図を加えたが、いずれも単色である。原色図も二十図おさめ、予算の枠を考慮しながら、当時としてはかなりの無理を申し出たことになったが、必要に応じて原色と単色の頁を交互とする個所があったり、手箱袋の錦は表裏を原色とするなど、精一杯、研究資料の提供という考えを前面に推すこととした。しかし、拡大図を原色で掲載することはしなかった。その理由を、今なればこそ「どうしてそうしなかったのか」などと問い返えすが、その時は考えも出来なかったのではなかったか。第一は撮影の問題。四×五カメラによる拡大図撮影であり、第二にはすでに佐々木先生のご著書で、単色拡大図の効果が成功していたからであろう。

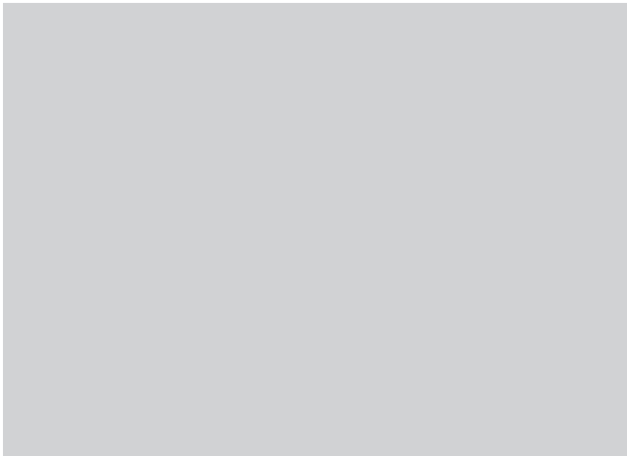
その佐々木先生のご著書は『上代裂組織の考察』（川島織物研究

所報告）で、五冊が一帙にまとめられた中でも『日本上代織技の研究』（昭和二十六年・同五十年新修）は、染織史研究をこころざす者にとつては基本中の基本とも言うべき内容で、上代織物に限らず多くの教示が詰まっている。文中の挿図として多数の拡大写真がまるで「痒いところに手がとどく」ように収録されている。いずれも単色であるのは先述したが、独特の文章と併せてきわめて説得力にとむ。しかし後述のように撮影にはご苦勞されたことがうかがえる。

『新修 日本上代織技の研究』の、挿入拡大図を任意にとりあげうかがおう。同書の第三図は川島織物所蔵（本書収録の裂はすべて川島織物所蔵、以下明記しない。）の白地布の拡大写真で、いかに

第一九圖 緋地雙鳳獅子文綾擴大圖

（測尺15Ⅰ）



挿図（『新修 日本上代織技の研究』）

も麻らしい固く引き締つた独自の質感や光沢がとらえられ、またゆるくS撚りのかかっているのも明確である。第七図は赤地生絁目交模様纈纈裂と名づけられた一裂の拡大図である。無撚の平組織の織物で、目交文様の一部が白く写っている。その部分の記述は、「第七図はその拡大図で、糸揃の整と経込の不整、及び染抜かれた部分に見る糸の緊つた硬さと、染め

られた地の柔かくホゴされた糸との対比の著しさが直ちに着目されて来る。」とあって、まさにそのとおりである。ことに白く染抜かれた文様部分と地染部分の糸の異質ぶりは、絶が本来生絹のものであり、後染加工の時に練の効果が付与されることが、よくうかがえる。このことは先生のこのところの記述が、その点にふれた最初であると考えられ、この拡大写真の効果は抜群であり、貴重である。第一八図は図版名に緋地双鳳獅子文綾とある裂で、第一九図はその拡大である(挿図)。平地に経四枚綾、右上りの部分がとらえられている。その記述は「平糸の外に、左撚や右撚を混淆しての重厚な羽二重経と、太い緯に因つての畝高い地味、及び文様部の経二筋、緯二越をハツリの単位とした大味な経四枚綾とが示されてある。」とされる。まさに経糸にはS撚りやZ撚りが平糸に混じって見出せる。拡大図ならではの効果である。しかし、この空間を限った小図においても、S・Z撚二様を見出すのは簡単ではない。先生は、折り畳み式の曲尺二分の目盛りのある拡大鏡一つで、見つけられるわけ、かねがね、最も説明にふさわしい撮影箇所を決定するのに時間がかかるのは当然で、ほとんど一日中、その箇所を探しつづける時もあると仰有つてをられたことを思い出す。又余談ながら、先生の織物調査はただこの拡大鏡だけをご持参で出かけられた。そのご指導を受けたわけで、この拡大鏡が唯一のたよりである。先年のウルムチにおける尼雅遺跡出土染織品の調査も同様であった。その頃、英仏の調査隊が先行し、いずれも巨大な装備をかつぎ込んでの出土染織品の調査であったと、中国人の副所長以下、簡単な器具による調査をおぼつかなく思っているらしい人達の言葉であった。第一九図には、裂地に鼻をつけるようにして、丹念に拡大鏡をのぞいておら

れる先生の御姿が彷彿するのである。またこのところをあえて注目されたのにも意味があると思われる。佐々木先生よりも幅広く、日中の染織史全般に通じていることを自認する研究者が、ことごと先生に対抗し、例えば糸のS撚は日本糸、Z撚りは中国糸であるとする説を立てていた。そのことは本人からじかに聞いた思い出があるが、佐々木先生は、そう単絡に言えるものではない事を、この拡大図で仰有ろうとしたのかも知れない。実際に名物裂にも一裂中に両撚の見出せるものが、いくつもあつた。ただし、羽二重経というのがそれほど明確ではない。第三〇図は焦茶地入子菱格子文羅唐花模様縹縹裂で、第三一図はその拡大図。「之に依つて一応縦方の複雑も窺ひ得るが、失張り未だしの感は深い。」とされ、そこで、先生独自の整然として、なお人々に解らせようという思いのこもつた、要領図が登場することとなる。第五五図は赤地唐花入二重格子文蜀江錦で、法隆寺に伝わる著名な錦の分れである。第五六図はその拡大図。「鏡下に置けば、単なる平織ではなくて特殊な組織が目映つて来る。第五六図はその組織の拡大図である。即ち図の右方の、色経が無交替状にある部分は平組織にも見えるが、左方に於て、経が跨り短く交替してある部分では三枚綾の様相となり、綾の流れの方向も跨りの長さに影響されて、或は右上り或は左上りと混り合っている。」と、これは先生流の命名による経複雑平組織の錦、つまり平組織の経錦の拡大図である。ここでは単色図版の限界に気づく。折角の指摘が原色であらわされていれば、さらに教示に説得力の高い効果が加わつた筈である。第七〇図は紫地七宝文錦で第七一図はその拡大図。「態と帛面の相当に傷んで表面の緯下に包まれてある特殊な経の露出している部分を撮つたのであるが、却て理解し難く

なっている故、(要領図が第七二図としてのせられた)」とある。この部分が選ばれた理由があり、あえて傷んだところを探して、調査し、写真にもおさめるこの先生ご教示の方法を受けついでいる。ここでも長い時間をかけて選ばれたのであろう。

以上、『新修 日本上代織技の研究』所載の拡大図に注目した。そのいずれにも「(測尺15—1)」とある。それは拡大図に限らず、裂の全景をとりあげたすべての図版にも例えば「(原寸)」「(縮尺3—4)」などと注記されている。しかも拡大図は15—1に統一され、原寸以外の他はほぼ3—4である。特に拡大図ではこのことわりは必要であり、重要である。『京都国立博物館』 国宝阿須賀神社伝来古神宝』では「(10—1率倍)」と拡大図のすべてに注記した。

また拡大図の撮影に苦労されたらしいことを先述したが、撮影には美術品撮影の名手、美苑堂小西晴美氏によつたと仰有っていた。そのことを小西氏にうかがうと自分ではないとの御返事で今のところは撮影者はわからない。川島織物、内部の写真師によるのであるか。各図は焦点の正確さに欠けるものがあり、かえって中央よりも周辺部に焦点の合っているものがあり、図の周辺に隈取りを施したように陰が円形にかぶっているものがあり、中心の部分が光ってしまつて、糸の立体感を損じているものがあるなどと、撮影時の苦労がしのばれる。拡大図を得るために、通常のレンズの前に例の折畳み式の拡大鏡をあてたとも仰有っていたことについては、それもあるが、普通の老眼鏡のレンズをあてても効果があると、小西氏の言である。いずれにしても、苦心の図版であることに違いはなく、大いに感動される。

その後、特に印象深い館蔵品図録には、昭和五十三・五十四年

(一九七八・七九)と二ヶ年つづいた刊行、『京都国立博物館 前田家伝来 名物裂』

がある。この出版は、先に佐々木先生の特別講義とも特別演習ともいふべきご指導の結果をもととしたものであるのは言うまでもない。撮影は多色を寺島郁雄氏、単色を宮原正行氏が担当された。名物裂各裂は原則として原寸大、原色図版とし、これにも拡大図を必ずそえることとした。これは当時としては類例なく、佐々木先生のご指導によつたものである。ところがここでも拡大図は単色処理で、今にして思えば残念なことである。それでも原色で収録した裂と対頁に拡大図を配することが出来、両者を並べて見ることが可能であるのは、研究資料として役立つ出版であるべき、公共機関の責をはたすことに叶うと、大仰に考えていたものである。拡大図は表裏をあらわしたものがあつて、各々に「(10—1倍)」の注記を必ず付した。しかし、やはり単色であるのは惜しいし、10—1倍は、先生の15—1倍に比すと、肝心の最も大切なところをとらえていないという、もどかしさに苛々する。反して拡大図の図版そのものは無駄に大きくとり過ぎていて思われる。「日本上代織技の研究」の拡大図の有意義とは比較にならないと、『名物裂』の頁をあげる度に感じるのである。

昭和六十二年(一九八七)の『日本の染織—技と美—』にも拡大写真を収載した。これは拙論の挿図としての扱いで、日頃、撮り溜めていた35ミリスライドから選んだもので、倍率なども揃わず、区々な各図に終始している。

平成四年(一九九二)、『興福院所蔵刺繍掛袱紗』は、興福院の依頼によつて、博物館が受託していた重要文化財指定の刺繍掛袱紗三十一枚を図録としたものである。元禄期にあふれるような華麗さを

再現することとし、撮影には博物館の金井杜男氏があたられた。出版は京都の美術出版、「しこうしゃ」が引き受けた。同書には刺繍の細部を拡大図として九十六図おさめた。それは切畑が研究資料として撮影していたものの中から選定した。初めて経験する全図原色の扱いである。さすがに効果は抜群で、江戸時代中期の、將軍を中心とした大奥が舞台で、最高の美と技がうかがえる刺繍に圧倒される思いを持った。拡大図から得られたその効果の一端を記せば、まず絹糸特有の光沢や立体感。多様な割り付け繡の針の運び。表面の黒糸の脱落部からのぞく生地に直接描かれた下絵。それは仕上がった文様とはかなり異なっていることの判明。下絵をたどるもの、下絵が全くなくて繡い上げたもの、それは繡師の豊かな絵心の存在を明らかにする。わずかに残存する黒糸や茶系色を見出すことによつて、その割付文様の当初の趣を推考することができるなどがあげられる。拡大図によつて、なお深く、種々の点が広く検討されなければならぬ筈である。

出版を重ねてこの書に至つたのであるが、一つの点で初心を忘失している事に今さら気づくことがある。それは、拡大率を表記しなかつたことである。撮影はオリンパスOM4を用い、マクロレンズにさらに接写用のリングを重ね、最大で三倍が撮影可能である。スケールを画面に入れるだけで倍率が明示できるのに、それを怠っている。さらに同書の場合は拡大図は対象部分によつては近づいたり遠ざかったりの一定しない扱いで、その都度いっそう倍率の明記が必要である。

染織の分野に限らず、美術史の各主題別の鑑賞を目的とした出版にしる、研究を主とした刊行にしる、今や、その感動の本源を見き

わめるべく、作品細部の拡大図は必須のものであると言つてよい。とくに研究的内容を中心とする場合は、さらに細部に注目し客観的に論証する為には、拡大図を十分に活用することは不可欠である。染織史研究においては佐々木先生以来の伝統がようやく、このところの原色処理ということ、別の成果を生み出して何よりである。今後はさらに撮影や印刷などに新しい変化もあり、この方面の展開が大いに期待される。しかし、先生の「この一点を選ぶ」、生命がけとも言わなければならぬ真剣さこそが原点であり、そのことを忘れてはいる自分に気づいて、愕然とするのである。